

失礼な「テオク」について —「テオク」の級外下位ポイントに着目して— 井上直美

本研究は、他者とのやりとりの中で用いられる「テオク」が失礼さを生むことに注目し、日本語母語話者の会話コーパスの実例から、なぜ「テオク」が聞き手に失礼な印象を与えるのか、その仕組みについて考察したものである。

「テオク」の先行研究は、準備、処置、放置といった意味・用法を扱うものが多く、本研究と関わりの深い「聞き手の印象」について論じられたものは少数である。そして、「テオク」の聞き手の印象は、「丁寧さ」や「感じの良さ」などプラスの面が主として取り上げられており、「失礼さ」を中心に分析を行ったものは見られない。また、なぜ「テオク」は「丁寧さ」と「失礼さ」のように相反する印象を与えるのかについても言及されていない。

そこで、本研究では『名大会話コーパス』を用いて、a. 行為者は誰か、b. 誰のための行為か、c. 行為の場面はいつかという観点から「テオク」の使用実態を捉え直した。まず「a. 行為者×b. 誰のための行為か」の組み合わせを指針として用例を考察し、次に c. 行為の場面はいつかによって、特徴的な「テオク」の用いられ方をタイプ別にまとめた。

これらの調査、考察の結果、他者とのやりとりの中に現れる「テオク」は、「相手の事情や意向を察し考慮した行為だという意図を示す」ことがわかった。そのような意図をもって発せられた「テオク」は、聞き手が「意向を察してくれた」と感じれば、丁寧な印象になる一方で、あなたのための行為だと明示されることに對し、「恩着せがましい」「厚かましい」と感じた場合には、失礼さが生じるのである。

以上のように、話し手が会話のやりとりの中で相手の状況や意向を察し考慮したつもりで「テオク」を用いても、聞き手の認識とずれが生じた場合、「テオク」は失礼さを生む可能性がある。その点において「テオク」の失礼さと丁寧さは表裏一体だと結論付けられる。

能動・受動の選択の複数の独立した有標性制約によるモデル

TOET RUDY

直接ニ受動文とそれに対応する能動文のうち、話し手がどのような仕組みを通じてどちらか一方を選ぶかについて考察し、調和文法(Harmonic Grammar; 最適性理論の前身)という理論枠組みを用いてその選択のモデルを提示する。まず、先行研究の基づいて、能動・受動の選択が少なくとも参加者の有情性、主題性、独立存在性、人称、指示性の五つと相関すると述べる。すなわち、有情物、高主題性のもの、文の表す事象と独立して存在するもの、一人称のもの、高指示性のものが主語に、そして非情物、低主題性のもの、文の表す事象以前には存在しなかったもの、三人称のもの、低指示性のものが非主語になる態が選ばれる傾向があるのである。次に、能動・受動の選択は「共感度」や「談話関連性」のような一つの概念に支配され、以上の五つの参加者属性はその概念と相関するに過ぎないとする還元的仮説の可能性について考える。つまり、参加者属性と能動・受動の選択との相関関係はそのような概念を介した間接的なものに過ぎないとする仮説である。主に英語の与格交替および属格交替における類似現象を中心とした汎言語的根拠を挙げ、五つの参加者属性がそれぞれ独立した要因として態の選択に直接影響を及ぼすという捉え方が妥当であると主張する。最後に、これらの参加者属性が能動・受動の選択を有標性階層から派生する有標性制約として左右するモデルを提示する。最適性理論の枠組みを採用した先行研究を手本にするが、標準最適性理論の基本原則の一つである、制約順序が厳格な支配関係を表すという原理は受け入れない。その代わりに、制約それぞれに実数の加重値が付与されることが基本原則である調和文法が適切な枠組みであると主張し、いくつかの入力に対する出力候補評価の例を示す。

主体の特徴としての動作を表す文について

呉涵涵

動詞を用いた特性（属性）の表現としては、「あの人は優れている」のような、金田一（1950）の第四種動詞を述語とする文がよく知られている。この場合は動詞自体が特性を表しているが、一方、「彼は大声でしゃべる」のような動詞述語文も特性を表す文の一種とされ、このタイプの文が特性を表すのは、動詞の時間的意味の抽象化によるとされている。しかし、「彼は酒を飲む」が酒好きであるという特性を表す文として成立するのに対して、「彼はカレーを食べる」がカレー好きであるという特性を表す文としては解釈されにくいという違いを、時間的意味の抽象化の起こりやすさ・にくさに求めるのは難しいのではないかと思われる。そこで、動作を表す動詞述語文が特性を表すようになるプロセスを時間的意味の抽象化とは別の次元で明らかにする必要がある。本発表では、このプロセスを明らかにすることを目的として、コーパス等から収集した用例の観察を行ったところ、以下のように、大きく3つのプロセスがあることが分かった。

現実の動作は必ず何らかの特徴（対象・様態・方法など）を伴っている。そして、その特徴には、偶発的なものもあれば、主体の内的要因にもとづく必然的なものもある。後者であれば、その特徴は動作に付随して繰り返し現れ、主体の本質的な特徴と見なされる。そうした内的要因には、信念や価値観などの意志的な動作の源泉になるもの（タイプⅠ）と、刺激に対する生理的・心理的な反応などを引き起こす体質・気質的なもの（タイプⅡ）がある。前者の例としては「欲しいものがあると、どんな汚い手を使ってでも手に入れる」などがあり、後者の例としては「緊張すると、痙攣を起こす」などがある。このほか、内的要因によらない場合もあり、それは、その動作に付随する特徴が一般的な基準に照らして特異であると話者が評価することを通して、その特徴が主体の特性と見なされるもの（タイプⅢ）である。「よく笑う」などがその典型例である。以上は人が主体の場合であるが、物が主体の例は非常に少ない。

話題間関連性と話題終了から見る話題開始表現の使い分け

朱怡潔

話題に関する従来の研究では、先行話題との内容的関連性により開始部に用いられる表現が異なると指摘されている。しかし、時間の流れに沿って進行していくという会話の性質を考えると、先行話題が終了しているかどうかということと、終了後すぐに後続話題が導入されるかどうかということが話題開始表現の生起環境であり、開始表現の使い分けに影響を与えることが予想される。そこで本発表では、日本語母語話者の雑談会話（6 会話、計 3 時間 19 分）を対象に、話題間関連性・話題終了の仕方・話題開始のタイミングの 3 つの要因から、話題を導入する際に開始表現がどのように使い分けられるかを明らかにした。その結果、以下の 5 点が得られた。(1) 直前より前の話題を再び導入する「復帰型」と「再出型」では、関連性を示すことが優先されるため接続詞等の関連性表示表現が多用される。(2) 全く言及したことのない「新出型」と、参加者同士で相づち等の終了表現が交わされていない「未完結」の後の話題の導入では、唐突さを緩和するために「あ」「え」のような認識の変化を示す表現が多用される。(3) 「新出型」と、相手がまだ話し終わっていないのに割り込むという「割込型」では、聞き手理解の負担を軽減するために「ねー」「聞いて」のような呼びかけ表現が多用される。(4) 先行話題の周辺的な語と派生関係にある「接線的派生型」と、参加者同士で相づち等の終了表現が交わされている「完結」の後の話題導入では、話題の焦点を明確に提示するために「とか」「って」のような表現が多用される。(5) 先行話題の中心的な部分と派生関係にある「典型的派生型」では、話題方向の転換に伴う不確かさを表示するために言いよどみ表現が多用される。このように、話題間関連性に加え、先行話題の終了の仕方と後続話題の開始のタイミングも開始表現の使い分けに関わっている。開始表現の使い分けは、次に導入する話題の内容を聞き手に予告し会話理解を助けると同時に、話題を導入する際に伴う話し手の躊躇を示したり、会話主導を回避したりすることで、良好な人間関係を保つことにもつながると考えられる。

接続詞「また」の機能領域の広さと対称性 —「さらに」「一方」と比較して— 井伊菜穂子

従来の接続詞研究の多くは、接続詞が前後の文脈をどのような連接関係で結びつけるかに着目してきた。一方で、従来の観点だけでは明らかにできない、連接類型の壁を越えた共通点をもつ接続詞がある。本発表では、類似の複数の事態を対称性を保ちつつ結びつける「また」を中心に、同じ添加型の「さらに」、異なる対比型の「一方」をとりあげ、接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲である機能領域の広さと前後の対称性を実証的に分析することによって、連接類型の壁を越えた接続詞の特徴を明らかにする。

分析対象のデータは、人文科学領域の研究論文 60 本中の本文の文頭で使用された接続詞「また」「さらに」「一方」の機能領域である。分析の結果、以下の 3 点が明らかになった。1 つ目は、段落頭で使用された方が段落内で使用されるよりも機能領域が広いこと。2 つ目は、とくに段落内で使用された場合、3 形式ともに機能領域の広さの対称性が高いこと。そして 3 つ目は、異なる連接類型に属する「また」と「一方」は量的な対称性だけでなく、文のタイプという質的な対称性も高いことである。

接続詞「また」は多くの場合、「一方」とは異なる性質をもつ接続詞として研究や教育現場で扱われている。しかし、機能領域という新しい分析観点から捉え直した結果、「また」と「一方」の間には、文のタイプの類似度の対称性が高く、とくに段落内で使用された場合は前後の文数の対称性も高いという、従来の連接類型の壁を越えた共通点が明らかになった。

今後、他の接続詞の性質についても機能領域の面から再考し、より精緻な接続詞の分類論や前後の文脈の精緻化・数値化につなげ、作文教育や自然言語処理への応用につながる研究を目指したい。

上代語における「不定語+ト」引用句と潜伏疑問文、間接疑問文

山田伸武

「太郎は誰が『雪国』の作者であるかを知らない。」と「太郎は『雪国』の作者を知らない。」とは文内容として等価と見られる。前者のように疑問文が補文として埋め込まれた文は間接疑問文(indirect question)と呼ばれ、後者のように補文として埋め込まれた疑問文と等価の働きをする名詞句(下線部)を文中に持つ文は潜伏疑問文(concealed question; CQ)と呼ばれている。このように現代日本語は間接疑問文と潜伏疑問文とを両方持つが、日本語において間接疑問文の成立は後発的なものであるということが近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)や高宮幸乃(2004)「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」(『三重大学日本語学文学』15)等に往々述べられている。特に、上代日本語には間接疑問文は存在せず、潜伏疑問文が間接疑問文と同様の表現を担っていたのではないかと高山善行(2018)「上代語の潜伏疑問文をめぐって——「知らず」構文の場合——」(国語語彙史研究会(編)『国語語彙史の研究 三十七』和泉書院)は述べている。ただ、先行研究においても、日本語において間接的な疑問を表現する際の方略がどのように通時展開していったかについては未だ明らかにされていないことが多い。

本発表では高山(2018)において取り上げられながら、関係の無いものとして考察のなされなかった「逢はむ日をその日と知らず[安波牟日乎其日等之良受]」(萬 3747)のような「引用句」に着目する。同例文は現代語における「逢う日を知らないで」「いつ逢うか知らないで」という文と等価にも解釈される。ここから潜伏疑問文や間接疑問文と引用句との並行性が示唆される。Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ)を用いて不定語の直下に引用の接続助詞トが接する用例を調査したところ、「道行き人を誰と知りてか[路行人乎孰跡知而可]」(萬 3102)のような境界例が確認出来たため、上代日本語には高山(2018)の述べるような潜伏疑問文だけでなく「引用句」という間接的な疑問表現の方略があり、疑問表現が補文に入り込む嚆矢となったと結論付ける。

古典語における形容詞連用形・テ形の副詞的用法について

菊池そのみ

本発表は形容詞テ形の副詞的用法の歴史的変化を形容詞連用形との比較に基づいて明らかにするものである。先行研究を踏まえば現代語では形容詞連用形の副詞的用法は許容される一方で、形容詞テ形の副詞的用法は許容されない（「早く走る」、「*早くて走る」）。これに対して中古語では形容詞連用形、テ形共に副詞的用法の用例が見られる。この点に着眼し、①通時的な用例調査によって量的推移、語のバリエーション、事態の特徴の3つの観点から形容詞テ形の副詞的用法の歴史的変化を捉えることと②形容詞連用形との比較に基づき、〈状況〉と〈様態〉との2類に分けることによって形容詞テ形の副詞的用法の衰退のプロセスを明らかにすることとの2点が本発表の目的である。

まず、通時的な用例調査によって形容詞テ形の副詞的用法について明らかにした点は以下の3点である。①上代・中古では形容詞テ形全体の3割程を占めていた副詞的用法は時代が下るに連れて減少する。②テ形となる形容詞とテ形に下接する動詞とに着眼すると、時代が下るに連れて語のバリエーションは減少していき、特に中古・中世鎌倉期に多く見られていた「過ぐ」、「過ぐす」、「止む」などの動詞が中世室町期以降には見られなくなる。③近世期には「久しうて〜」の形で固定化した用例や恒常的な性質を表す用例が中心となり、後者は現代語にも一部残っていると言える。

次に用例調査を踏まえ、〈状況〉、〈様態〉の別を導入することによって形容詞テ形の副詞的用法の衰退プロセスの解明を試みる。まず、形容詞連用形との比較から上代・中古語の形容詞テ形は〈状況〉を表すものであることを示す。この副詞的用法の形容詞テ形は節内に主節と異なる主語が現れるということから現代語の副詞的用法（従属節分類における「A類」）のテ形節よりも節サイズが大きかったと考えられる。このことを踏まえ、時代が下るに連れて〈状況〉の用例が減少していくことは副詞的用法のテ形節の節サイズが次第に小さくなっていく（＝主節と異なる主語を許容できなくなる）ことと連動しているという可能性を指摘する。

接続助詞的トコロデの歴史的変遷 —トコロガとの関係再考—

三浦さつき

「今から出かけたところで、3 時に京都は間に合わない」のような、トコロデを使った逆接仮定表現の歴史的変遷について扱った。中世後期にはこの表現は存在せず、ホドニ、ニヨッテと同様の原因・理由を表す表現として存在していた。これらは近世前期には少数例を残して失われ、先に逆接仮定表現を有していたトコロガから近代期に逆接仮定表現を得るというのがこれまでの説〔靄岡昭夫 (1972) 「「ところが」と「ところで」の通時的考察—その逆接仮定表現用法の成立時期をめぐって」『国語学』88〕であった。

本発表では未調査である中古トコロニテから扱い、これまで詳細がわからなかった中世後期トコロデへの拡大の様子と、近代で逆接用法を得る素地が近世にあったか、トコロガはトコロデよりもなぜ先に逆接仮定用法を得たのかを観点に調査を行った。その結果、①中古から中世後期にかけては、中古では場所、状況の格関係、断定助動詞ナリ連用形ニ+接続助詞テの中止法で構成される様相を見せ、中世後期の文構造拡大では、これらの全てが源流になり、形成される因果関係も時間や状況、属性同定から連続していること。②トコロガの形は中世前期から見られ、箇所、面といった意味を持ち、述語で存在表現や感情形容詞、属性形容詞を表すところから、前句が動詞連体形になり、後件が評価性、動詞句を接する接続表現へと拡張したこと、③トコロデの逆接仮定への経路は、近世期に未実現に傾いたトコロデの時間用法が、その展開や結果を表すことで判断性を獲得したことがその素地を形成したこと、④トコロガ、トコロデの逆接仮定表現は共に歴史的には不定語を接する例が存在せず、このことから典型的にはトコロデの逆接仮定は既知だけを表し、対して並列表現ができるデモ等のトコロデ以外の逆接表現は、全称的で既知も未知も表すことが出来る性質であることを述べた。

時間関係を表す「やさき」の成立

藤田優子

「やさき」は、「やさき」が構成する句に表される事態（前件）と、その後続句に表される事態（後件）とが時間的に近接して成立することを表す形式である。近接した先後関係を表す形式の多くは、「帰るまぎわに雨が止んだ」や「帰るやいなや雨が止んだ」のように、直前か直後かどちらか一方のみを表すが、「やさき」は、「商売を始める矢先に事故が起きた」や、「調査が始まった矢先に事故が起きた」のように、ル形・タ形で直前・直後を表しわけ。このような「やさき」に特有の時間的意味を、成立過程を辿ることによって説明することが、本発表の目的である。

まず、「矢の先端」という具体的な物の部分の意味から、中世までに「矢の向かう先（＝方向）」という空間的意味が生まれる。そして近世に入り、連体節をうけ句を構成するようになり、前件と後件の時間関係を表すようになった。

(1) いつそあきらめにもならふかと思ふ矢さきへ、似た人の聲がしてさへ、思ひ出す心がたへねへ今日このごろ。

「春色辰巳園」初編巻之 2

前件述語をみると、近世には前件述語にル形で継続中を表す思考・感情の動詞が現れる。近代にはテイル形で継続中を表す述語が多くなり、動詞の種類が増える。この時、表される時間的意味は、前件の継続中に後件の発生が位置づけられるという部分的な同時性である。後件が位置づけられる位置は、前件の継続中の期間の任意の時点ではなく、「矢の向かう先」という空間的意味を反映して、事態の限界達成の時点捉える。

(2) 英國及米國の如き其商業上の競争國が何時にても正金引換に應ずる矢先に斯る姑息手段を採り、

雑誌「太陽」1901 年 1 号

1900 年以降、前件述語・後件述語ともに完成相の例が現れる。(2)の前件・後件は時間的な重なりはないが、近接している。このような時間関係は、近接した二つの事態が同一時間帯に起こることを捉える接触的同時性といえる。

20 世紀後半の外来語使用急増の一過程 ―外来語「パターン」の増加過程を例に―

石暘暘

20 世紀後半の日本語において抽象的な外来語が急増することが指摘されるが、その具体的な増加過程については、まだ明らかになっていない部分が多い。本発表では、まず「パターン」の増加過程を検討する。そして、類似の変化が見られる語も取り上げて、20 世紀後半の抽象的な外来語使用の増加に、どのような過程の変化があったのかを探る。

「パターン」は借用初期に「型紙」「図案」という具象的意味で、洋裁・テレビ放送の分野に限り用いられた。だが、1970 年代から、「一定の決まりを持った繰り返しの型」という抽象的意味が急増し、経済・政治の分野等、一般的に用いられるようになった。この抽象的意味の登場によって、「パターン」が急増し、一般化した。

「パターン」と類似する変化は、「ポイント」「イメージ」にも見られる。「ポイント」は借用初期に「転轍機」「活字の大きさの単位」という具象的意味で、鉄道・印刷の分野に限られたが、1960 年代頃から「要点」という抽象的意味が急増し、スポーツ・外交の分野等、一般的に用いられるようになった。また、「イメージ」は借用初期に「物事の具体的な映像」という意味で、文学や新聞の文化面に限られたが、1960 年代から「物事の典型像」という抽象的意味が急増し、政治・経済の分野をはじめ一般的に使われるようになった。これらの語はいずれも借用初期の具象的意味からかなり離れた抽象的意味に変化し、「意味の断絶」があるといえる。また、使用分野も借用初期の専門用語から経済・政治などの幅広い分野に変化し、「使用分野の断絶」もあるといえる。つまり、3 語とも、急増した抽象的意味は、借用初期の具象的意味との間に、意味・使用分野における断絶が存在している。このような変化は、おそらく日本語内で生じたものではなく、原語からあらためて抽象的意味を借用しなおしたものの、すなわち「再借用」と思われる。

このように、1960・70 年代に原語からの抽象的意味の「再借用」が起こったと考えられる。そして、このことは、20 世紀後半の抽象的な外来語使用の急増の一過程ととらえられる。

全国資料を用いた終助詞「モノ類」の地理的分布
—藤原与一の調査と方言談話資料『ふるさとことば集成』との対照から—
小原雄次郎

終助詞「モノ類」（「だって雨なんだもん」の「もん」）は、北海道から沖縄まで全国に広く分布しており、いくつかの地域では形態と意味に多様性がみられる。本発表では、藤原与一の記述調査と『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』のデータを対照させることで、終助詞「モノ類」の地理的分布のありようを提示する。

藤原与一の『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』（1986:324-342）は、終助詞「モノ類」について全国規模で扱った唯一のものであり、かつ半世紀以上も前のフィールド調査のデータが用いられている。それゆえ「モノ類」を研究する上で重要な資料となっている。ただ、その活用においては記述内容の検証が不可欠である。

今春、『日本語諸方言コーパス（COJADS）』のモニター版が公開されたことで、同コーパス所収の『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』（国書刊行会、2002-2008）の分析が容易になった。本発表では、『日本語諸方言コーパス』を利用することで、藤原の研究と『ふるさとことば集成』のデータを突き合わせ、終助詞「モノ類」の地理的分布について考察を行った。

調査にあたっては、藤原与一の調査を形態の側面に絞って定量化することから始めた。藤原は終助詞の各形態が各県でどの程度用いられているかを「〇〇県下では～がさかんである」や「～が見られる」のような表現で記述しているため、これらは「高頻度の使用」と「一定の使用」の二段階に分け、それが『ふるさとことば集成』での出現数と対応しているかを調べた。調査の結果、藤原のフィールド調査と『ふるさとことば集成』のデータはおおむね対応していることが確認できた。また、両資料が対応しない部分からは、それぞれの資料の性質の違いが浮き彫りになった。

Web 言語調査による若年世代方言の全国分布

吉田健二, 南波茉奈

全国規模の言語調査は、『日本言語地図』を嚆矢として最新の『新・日本言語地図』まで時期をへだてて行われているが、後者でも主に現在 75 歳以上の最高齢層のデータであり、その後の世代におきた変化を見わたすことはできない。発表者は Web アンケート作成ツール CREATIVE SURVEY を用いた全国調査により 47 都道府県、1396 人から回答を得、現在の若年世代方言の分布を検討した。調査項目は上記調査のものを中心とする 22 項目。発表では調査時（2018 年）に 39 歳以下だった 1253 名のデータの地理的分布をみる。言語地図は統計言語 R の maptool 関数等をもちいて、Natural Earth 提供の白地図上に記号をプロットして作成した。地点は自己申告によるが（5-15 歳で最も長くすんだ市区町村）、近年の全国調査と酷似する、あるいはそこでの予測と合致する地理的分布が得られており（「痣」三井はるみ 1999「新しい方言と古い方言の全国分布」『日本語学』18-13, 「自動車学校の短縮形」日高水穂 2009「自動車学校か自動車教習所か」『日本語学』28-14）、信頼性があるとかんがえられる。知見の一部を挙げると、「痣」の分布は、三井論文で近畿までの拡大が報告されるアオタンが沖縄宮古島まで到達し、クロ系が後退しアオ系が勢力を拡大している。断定辞「だ」の分布は『新・日本言語地図』と概略一致するが、ジャが山陽以外で勢力を失い、九州のバイ・タイも西日本一帯で勢力をつよめるヤの進出をうける。「おそろしい」にヤバイがみられ（59 人）、いわゆる若者言葉の定着の可能性をうかがわせる。「おもしろい」で関西弁のオモロイが全国に拡大している。「おそろしい」のコエ、「ありがとう（買い物時）」のへバ、「しなかったら」のシネバ・サネバなど東北日本海側のみに分布する方言形がまとまってみられ、一定の独自性をもつ方言圏が成立している可能性がうかがえる。これらの結果は、若年世代方言にも、標準語化による平準化のみでなく、かつての分布域を基盤とした勢力変化、新形式の進出、新方言圏の現出など、記述研究に値する動向がみられることを示唆する。

民話資料のコーパス的利用の可能性 ―「宮城県の民話」の分析から―

寺嶋大輔

本発表の目的は、民話資料を方言研究のためのコーパス資料的に用いることの有用性を、宮城県教育委員会(編)(1988)『宮城県文化財調査報告書 第130集 宮城県の民話 -民話伝承調査報告書-』(宮城県教育委員会)の分析をもとに、実証的に示すことにある。この資料は、県内各地に伝わる民話を「みやぎ民話の会」が録音・翻字したものである。

この資料の約35万字のテキストについて命令・依頼表現に着目し、文末で用いられた待遇表現ごとに1. 単純命令、2. テケロ類(「てくれ」に相当する依頼な表現)、3. ライン類(「なさい」に相当する丁寧な表現)、4. テケライン類(「てくれなさい」に相当する丁寧な依頼)の4種類に大別し、登場人物の性別によるこれら待遇表現の使用の性差を分析したほか、具体的な関係性や使用状況について実際の例文を用いながら考察した。

使用回数を分析した結果、単純命令は男性の登場人物が比較的多く用いる一方、ライン類は女性の登場人物が使用する状況が極めて多いことが判明した。当該方言では、「～ライン」は女性的な言い回しであると言われるが、それが量的にも実証された形になる。また、共通語では「てくれ」を用いることがふさわしいような状況でも、宮城県方言ではそれに相当するテケレ類ではなく単純命令を用いることが多い、共通語では目上の人に物事を頼むときは「～してください」と丁寧な依頼の形をとるのに対し、宮城県方言では目上の人にライン類、すなわち丁寧な命令を用いることができることも、実際の例文の分析から明らかにした。

この分析が示すように、テキストの量・質ともに豊富な民話資料はコーパスのように用いることが可能であり、方言性が保証されていることを確認したうえで活用すれば、方言研究にとって強力なツールとなりうることが期待される。

八丈語の二格形容詞

三樹陽介

本発表では、八丈語の形容詞二項述語文における与格交替の成立条件について論じた。

日本語諸方言では形容詞に先行するガ格（主格）がニ格（与格）と交替し（以下、与格交替）形容詞項にニ格を伴う例がしばしばみられる。下地理則ほか（2018）「与格項形容詞構文について～宮崎県椎葉村尾前方言を中心に～ ver. 2018. 01. 01」（第 43 回九州方言研究会発表資料）は、宮崎県椎葉村尾前方言を例に、与格交替が他動形容詞文に現れ、意味役割・形容詞述語・心的影響に階層があることを指摘している。どのような形容詞において与格交替が成立するのか、他方言にみられる階層が八丈語の与格項形容詞構文にも存在するのか、という観点から、臨地調査で得たデータを基に論じたものである。

末吉方言は他動形容詞文の心情形容詞と感情形容詞のうち、ネガティブな意味を持つ形容詞文においてのみ与格交替が成立し、下地ほか（2018）の暫定二重主語文や、ポジティブな意味を持つ他動形容詞では成立しない。このことは下地（2018）で示された階層に違反しない。末吉方言の場合、必ず第二項から第一項への刺激があることが成立の条件であり、その刺激を発話者が認識していることが与格交替成立に大きく影響を与えている。そのため、暫定二重主語文では与格交替が成立せず、また、他動形容詞であってもポジティブなものは刺激の認識が弱いため成立しにくいものと考ええる。

東日本の方言の与格交替は資料がほとんどなく、与格項形容詞構文は管見の限り既存の談話資料にもほとんど現れていないことから、与格交替の成立条件や階層を明らかにし、他方言との比較を可能にしたことは学術的意義があるものと考ええる。

北琉球語喜界島方言の授与動詞

荻野千砂子

北琉球語の鹿児島県大島郡喜界島方言の授与を表す動詞の体系を明らかにすることを第一の目的とした。調査地点は、^{かみ}上^{かてつ}嘉^な鉄^{なかま}、^さ中^{さかみね}間^{しとおけ}、^お坂^{おのつ}嶺^つ、^し志^{しとおけ}戸^{おのつ}桶、^お小^{おのつ}野^つ津の五集落である。授与動詞とは、一人称から遠心方向へ物が所有権と共に移動することを表す動詞とする。授与動詞ヤツタに相当する語には非敬語形の k'uri-taN があり、敬語形には agi-taN と weesi-taN がある。weesi-taN は共通語サシアゲタに相当する。補語を高く位置づける機能を持ち、「主語<補語」で用いられる。しかし、(1) のように「主語>補語」の関係での使用が許容されることがある（用例は上嘉鉄方言）。そこで、weesi-taN の機能を明らかにすることを第二の目的とした。

- (1) cizi//nu waNnaa uzii//eN hanataba weesi-taN//doo.
 知事//主格 私達の おじ//与格 花束 サシアゲルー過去//終助詞
 知事がおじに花束を*サシアゲタ。（*は共通語で非文法的であることを表す）

調査の結果、k'uri-taN は話し手より主語と補語が下位者のときと、上位者主語でも「主語>補語」のときに使用され、agi-taN は「主語<補語」と「上位者主語=上位者補語」で使用されることが分かった。agi-taN は中間と坂嶺で用いられる。weesi-taN は補語を高く位置づける機能を持つが、「上位者主語=上位者補語」の場合も用いられ、「上位者主語>上位者補語」の場合でも「上位者主語=上位者補語」とみなし許容する。よって、主語を軽度にも高める「主語恭敬機能」があると言える。他にも「授与方向優先の機能」を持ち、「話し手≧補語」で「下位者主語→上位者補語」が許容される。さらに敬語上の I 人称がなく、一人称複数補語の場合に「下位者主語→一人称複数補語」が許容される「上位者優先のルール」を持つ。これらの特徴は、南琉球の石垣宮良方言の ujoohuN (サシアゲル) と共通する。だが weesiiN は「ご先祖に供物を供える」意味が第一義であり、日常の物の授与では使用できない等、異なる点もある。

ミクロネシア地域の言語における日本語起源借用語の比較研究

今村圭介, ダニエル・ロング

筆者らはこれまで、ミクロネシア地域の旧南洋群島において日本語起源借用語(JOL)の収集、記述、分析に努めてきた。本研究は JOL の言語間の類似点および相違点を記述し、その社会言語学的な要因を考察しようと試みるものである。チャモロ語、カロリン語、ポナペ語、チューク語、コスラエ語、マーシャル語、ヤップ語、パラオ語を主な考察対象として、それぞれの言語の JOL の特徴を比較考察する。まず各言語に取り入れられた借用語にどのような類似点があるのか、統計手法の数量化 III 類にかけ、分析した。結果として、ミクロネシアの諸言語で取り入れられた JOL は類似していることがわかった。また、数量化の散布図と各言語が話されている地理的な位置が類似しており、JOL の取り入れられ方に地理的な類似関係があることが浮き彫りになった。次に、意味変化に関して、言語間で見られる類似点とその発生原因を考察した。意味変化は地域的な類似点は少ないと考えられるが、共通する意味変化が見られた。その原因として語形の「二次的借用」(変化した意味の伝播)、「古形の残存」、当時の「類似社会環境」が考えられた。次に取り入れられた JOL の音韻的特徴を、ミクロネシアの多くの言語にない/z/, /h/, /f/から考察した。結果、パラオ語、ヤップ語、カロリン語に見られたのに対して、他の言語には見られなかった。音素の新規作成は、日本人人口の割合の高さやリングガフランカとしての日本語の使用頻度などから、日本語との強い言語接触があった言語に見られると考えられた。また、形態変化や派生について比較考察したところ、形態変化や派生は借用語の数が多い言語により多く見られた。JOL が多く取り入れられれば、それだけその言語の一部と受け入れられ、その結果派生や形態変化が起こりやすいと考えられた。

岡山県東部方言のアクセントの成立過程

中澤光平

本発表は、岡山県東部方言のアクセントの成立過程について、発表者の調査データを基に考察する。

岡山県東部の日生（ひなせ）や寒河（そうご）で話される方言では、アクセントに基づく語彙分類である金田一語類（上野 2006「日本語アクセントの再建」『言語研究』130）のうち、2 拍名詞の 2 類と 3 類が区別されることで知られている（中井 2002「岡山県寒河方言のアクセント」『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究 3』）。具体的な音調では、2 類は HL のような頭高型（1 型）なのに対し、3 類は LH(-L) のような尾高型（2 型）で現れる。3 拍名詞でも、2 類は概ね 2 型に対応し、4 類の 3 型と対立している。京都や大阪などの中央式（上野 1987「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42）では、2 拍名詞の 2 類と 3 類、3 拍名詞の 2 類と 4 類がそれぞれ合流している。この合流は東京や広島市などの中輪式でも生じていて、中輪式が中央式に系統的に近いことを示唆するが、岡山県東部方言は、中央式の段階を経なかったことを示している。

岡山県に地理的に近い広島市のアクセント（馬瀬良雄 1994『広島市方言アクセント辞典』より）は中央式の下降位置が規則的に 1 拍後ろにずれているのに対し、岡山県東部では 2 拍 2 類と 3 拍 2 類で下降位置が中央式と同じであることがわかる。これは、HL > LH(-L) や HHL > LHH(-L) のような尾高型への変化が岡山県東部では生じなかったことを示しており、2 拍 3 類や 3 拍 4 類の尾高型は *LL > HL > LH(-L), *LLL > HHL > LHH(-L) という変化ではなく、低平調から直接変化したと推定される。

2, 3 拍名詞と同様の対応が、例外はあるものの 4 拍名詞にも認められる（例：「金持ち、唇、杯（さかずき）、…」：「剃刀、雷、一日（ついたち）、…」）ことから、岡山県東部方言の尾高型は祖形の低平型に対応し、LLLL > HHHL のような合流は生じなかったと推定される。

ソウダ節での音調中和にかかわる構造的・地域的要因

那須昭夫

本発表では、付属語「ソウダ」を含む文節の音調に生じつつある中和の実態について報告し、中和の成否に影響する構造的・地域的要因について考察する。

ソウダはいわゆる式保存型の付属語で、前接動詞における二型の音調対立を文節全体に引き継ぐ性質がある。平板動詞にソウダが付属した文節は平板式で、起伏動詞にソウダが付属した文節は起伏式で現れる。しかし、近年この規則性には綻びが生じ始めており、平板動詞を含むソウダ節が起伏化する事例（中和）が観察されるようになってきた。本研究では中和の実態を探るべく録音調査を実施し、次の事実①～④を捉えた。

①ソウダ節での中和頻度は4割弱であり、これは他の式保存型付属語での中和頻度に比べて低い。このためソウダ節での音調中和はいまだ萌芽的な段階にあると見られる。②前接動詞の拍数が多いほど中和音調が現れやすい。とくに、1・2拍と3・4拍の間に有意な境界がある。動詞の拍数は文節長に反映されることから、文節が長くなればなるほど中和が発生しやすくなると言える。この傾向は、平板形式の起伏化に起因する他の音調中和現象（第Ⅰ類形容詞の起伏化・複合動詞での山田法則の衰退）にも通底する機序である。③ソウダ節に先行する文節の音調指定（核の有無）が中和の成否に影響する。無核文節が先行する環境の方が中和を生じやすく、反対に有核文節先行環境では中和が抑制されやすい。この事実は、連文節の音調構造が中和の成否に関与していることを示唆する点で「アクセント単位の句レベル化」の一事例と見ることができる。④話者の出身地域により中和頻度が異なる。とくに無アクセント地域出身者では群を抜いて中和音調の生起率が高く、ほぼ6割に迫る勢いである。本発表ではこの実態の背景について、無アクセント地域出身者の内省では前接動詞での二型の音調対立に関する弁別認識が曖昧化しやすく、そのことが、前接動詞の音調情報を取りたてて必要としない中和音調の選好につながったとの解釈を示した。

現代短歌における二重表記の役割 ー日本語学の見地からー

清水恵理

日本語表記の特徴の一つに多様な二重表記があり、近年では「^{トランプ}兵隊」「^{ベストセラー}啓発本」のように本文である主表記と、振り仮名である副表記に意味の異なりがある使用例が、文芸作品を中心に使用されている。特に音数上の制約を強く受けるという特徴から、現代短歌の二重表記には工夫が見られる。そこで本研究では、パッケージ化された 64 冊の個人歌集から用例収集・分類を行い二重表記の機能を整理し、その特徴を明らかにすることを目的とした。本研究独自に設定した分類を以下に示す。

現代短歌の二重表記分類（〈〉内に下位分類・例を示す）**(1)限定**：二種以上の読みを持つ主表記の読みを限定する。
 〈1-1 限定：^{ひとひ}一日，1-2 記号：^{イコール}＝〉 **(2)翻訳**：和語英訳等を示す。〈2-1 翻訳：^{シスター}修道女〉 **(3)代名詞**：副表記に代名詞を用いて主表記を指す。〈3-1 人称：^{きみ}妹，3-2 場所：^こ礼拝堂〉 **(4)説明**：主表記に具体性を持たせ副表記を説明する。
 〈4-1 要素：^{まど}車窓，4-2 概念：^{とき}時代，4-3 略語：^{もんしろ}紋白蝶，4-4 オノマトペ：^べ赤ちゃん〉 **(5)相補**：異なる語が相互にイメージを補い合う。〈5-1 相補：^{ベストセラー}啓発本，5-2 修飾：^{はか}男〉 **(6)比喻**：「（主表記）のような（副表記）」の語関係を示す。
 〈6-1 比喻：^{まなこ}惑星〉 **(7)包摂**：より大きな概念で一方を示す。〈7-1 包摂：^{なつむし}蛭〉以上 7 分類である。本調査では分類に該当する二重表記 426 例を収集した。内(1)限定から(4)説明の分類については、先行研究で論じられており、本調査収集例の 90%以上が該当するため安定的な二重表記と言える。一方、(5)相補から(7)包摂はこれまでの研究においてあまり扱われていない分類で、比較的新しい二重表記と言える。作者別にみると安定的な二重表記の使用に作者性差があまり見られなかったのに対し、(5)相補から(7)包摂の使用は男性 9 名（15 例）、女性 3 名（6 例）と男性が多く使用している。特に(5)相補についてはより男性の使用が顕著である。そのため現代短歌で見られる(5)相補のような比較的新しい二重表記の使用は、男性歌人によって牽引されていると言える。

マギル疼痛質問票日本語版における痛み表現に関する研究 ―感覚的表現を中心に―

華迪聖

本稿は中村（1986）『痛みへの挑戦』、佐藤（1988）「McGill Pain Questionnaire 日本語版の検討」（『第 52 回日本心理学会大会発表論文集』）、熊澤（1999）『標準痛みの用語集』の三つのマギル疼痛質問票日本語版の感覚的表現（計 126 個）を取り上げて照らし合わせながら、言語学の立場より痛み表現の方法と特徴及び各日本語版に見られる翻訳上の問題点について考察してみた。その結果は以下の通りである。

痛み表現の方法と特徴について：①痛みの感覚は共有不可能の特性を有するため、「ような」の比喻指標が積極的に用いた直喩表現やオノマトペを利用して抽象的感觉を具現化する効果が見られた。②表現の構造と品詞性を分析すると、動詞の使用が多く見られる。よって、痛みという感覚は動的に捉えられることがわかった。③比喻表現に含まれる単純動詞・複合動詞やオノマトペの音象徴（清音、濁音、促音、長音、撥音）を利用し、痛みの程度上の差異を表す表現法が観察された。翻訳上の問題点について：①中村翻訳版の中では「気にさわる」「不快な」「気になる」「激しい」等のような不明瞭な表現が続出する。②誤訳に関しては、原文の boring（〈穴を〉あける）、lancinating（刺す、突き通す）に対して中村翻訳版ではそれぞれ「削るような」、「引き裂くような」に翻訳されている。原文の垂直的運動が中村翻訳版の水平的運動に本質的に変わってきた。また、taut（〈筋肉・神経が〉緊張した、張る）に対して佐藤翻訳版では「はてるような（陽焼けした時のような）」に翻訳されており、完全に誤訳と判断できる。さらに、感覚的表現の rasping（搔く、擦る）に対して中村翻訳版と熊澤翻訳版では「いらいらする」という情動的表現に翻訳されている。その他、訳者によって受動文（中村、佐藤）か能動文（熊澤）の使用上の相違も見られた。三種類の日本語訳版の各表現の重複率を見れば、中村翻訳版と佐藤翻訳版は独自に作成されたものであるが、熊澤翻訳版は中村翻訳版と佐藤翻訳版を参考に作成されたことも窺えた。

『日本語歴史コーパス 和歌集編』Ver. 1.0 の公開

松崎安子, 小木曾智信, 中村壮範

本発表では 2019 年秋にアップデートを行う『日本語歴史コーパス (以下 CHJ) 和歌集編』Ver. 1.0 の内容について報告し、今後の活用の可能性について述べる。

『CHJ 和歌集編』は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果の一つとして 2019 年 3 月に短単位データを収録した ver. 0.8 を公開した。今回のアップデートでは、長単位および掛詞の情報、そして歌人情報のリンクが加わることを報告する。

(1) 長単位は文節を基礎として規定される単位で、複合語等が 1 単位として扱われる。今回『CHJ 和歌集編』に長単位の情報が加わることで、既に長単位が付与され公開済みの『CHJ 奈良時代編 I 万葉集』や『CHJ 平安時代編』の中古仮名文学作品との対照が可能となり、各時代・作品の特徴的な語が把握できると期待される。

(2) 『CHJ 和歌集編』の掛詞は、歴史コーパスの質的拡張の試みとして、本文の同一箇所に対して複数の形態論情報が付与できるよう開発された「形態論情報の多重化」の成果の一つである。本発表では、『CHJ 和歌集編』の本文（以下「主本文」とも）に対し掛詞情報を付与する過程で問題となったいくつかのパターンを取り上げ、構築段階での処理方法と、それらが反映された「中納言」検索結果の表示について説明を行う。

(3) 和歌の作者については、「よみ人知らず」を除いた歌人のうち 16%につき公開済みの作者情報に加えて「国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities)」へのリンクが可能となったことを報告する。

“専門連語”が示唆するもの ―連語の単位性と専門概念の名づけをめぐって―

小宮千鶴子

専門語は、「日常一般に使われる語（一般語，日常語）に対して，専門分野で専門の概念を表すために用いられる語」と規定される（石井正彦（2007）「専門語」『日本語学大辞典』）。専門語は大半が名詞で，「価格を決める」「価格を考える」（下線部は専門語，以下同様）などと使用される。前者のように「専門語とは別個に専門概念を表わす」連語は，小宮千鶴子（2002）「専門連語と専門連語辞書」（『情報知識学会誌』12-1）により“専門連語”と呼ばれている。「連語」という用語にはさまざまな規定があるが，“専門連語”における「連語」は，基本的に言語学研究会の規定に従う。「連語」は名づけの単位とされるが，そうであれば，“専門連語”は専門概念を名づける単位といえる。

「連語」に関しては，言語学研究会内にも異論がある。本発表は，「連語」の，範囲，分類，所与性，必要性に関して，“専門連語”が与える示唆を明らかにすることを目的とし，発表者が中学高校教科書から選定した経済の“専門連語”と化学の“専門連語”を資料にして，「連語」に関する先行研究を検討した。

その結果，連語の範囲は，「価格が上がる」「酸化と還元」などが“専門連語”であることから，「従属的なむすびつき」だけでなく「陳述的なむすびつき」「並列的なむすびつき」も連語の範囲に含めることが支持された。連語の分類は，“専門連語”では，従来の「カザラレ中心」ではなく，「分子が衝突する」「価格を決める」「強い酸性」「土地の価格」など「専門語中心」であることが示された。連語の所与性については，“専門連語”は，専門分野における正確な情報伝達のために特定の連語を覚える必要があり，所与性があることが示された。連語の必要性については，“専門連語”は，連語と同様に，ひとつの専門語だけでは表わせない，現象や状態，事物の側面など複雑な専門概念を表わすだけでなく，複雑な専門概念を名づけて一旦保存し，必要に応じて「景気循環」「高価格」などの複合語として送り出すブールの役割も果たしていることが示唆された。

明治・大正期の文学作品コーパスの設計とその課題

高橋雄太, 服部紀子, 小木曾智信

本発表では、明治・大正期における文学作品コーパスの設計と課題について報告する。本コーパスは国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の成果、『日本語歴史コーパス 明治・大正編』のサブコーパスの一つとして、検索アプリケーション「中納言」を通して 2020 年度末に公開される予定である。

構築対象となる文学作品は、国立国語研究所に設置された国語辞典編集準備室で 1980 年に作成された「用例採集のための主要文学作品目録」(以下「目録」)を基に選定した。コーパス構築の観点から文学作品を調査すると、①作品毎の規模の差、②作家毎の作品数の差、③74 作品で 500 万語超の大規模、といった問題点が浮き彫りとなった。そこで、(1)「目録」の中で重要度の高いとされる作品を優先、(2)一作家につき一作品、(3)各年代・各時代から均等に採用、(4)「目録」に多くの作品が選定される作家を優先、の 4 方針を立て、21 作品を選定した。その際、10 年刻みの各年代に 5 作品ずつ、明治と大正にそれぞれ 11 作品と 10 作品を採用し、偏りを極力減らすよう設計した。また、5 万語を超えるような大規模な作品につき、日本語研究に全文が必要なのかを検討するため、実験を行った。『吾輩は猫である』と『或る女』を例に、1 万語規模ごとの段階的なデータセットをそれぞれ 8 段階準備し、各段階で共通して出現する語と一方に独自に出現する語の特徴を調査し、また雑誌コーパスとの比較も行った。その結果、機能語(助詞/助動詞/形式名詞/文法的機能を持つ動詞・形容詞)やコソアドの類などの、基礎的な語彙は両作品と雑誌に共通して出現することや、登場人物や舞台、ストーリー性にまつわる語が各作品に独自に出現することを確認した。

なお、発表ではコアデータと非コアデータの設計についても述べる。本コーパスでは全ての作品にコアデータを設定し、作品に独自に登場する固有名詞や表記を解析用の辞書に登録することにより、非コアデータの解析精度の向上を目指すことを述べる。

どのような場面で「私は娘をほめられた」と言うのか
—日本語母語話者を対象としたアンケート調査から—

村上佳恵

本発表は、日本語母語話者 120 名を対象に実施した受身の使用場面のアンケート調査の結果を報告し、持ち主受身の文が被害性のない解釈を持つのはどのような場合であるかを考察するものである。持ち主の受身は、「私は知らない人に腕をつかまれた」のような受身文のガ格名詞句が直接行為を受けている場合は被害性のない解釈が可能で、「私は友達に自転車を修理された」のような行為を受けていない場合は被害性を持つと一般化できそうである。しかし、行為を受けたか否かという観点で考えると、「私は先生に娘をほめられた」という例文は、問題になる。この文は、「先生が私に対し娘についてのほめ言葉を述べた」という行為を受けた解釈と、「先生が娘に対し娘についてのほめの言葉を述べた」という行為を受けていない解釈があるからである。本発表では、日本語母語話者を対象に、状況説明文を読み「この出来事を家族に話す場合、どのように話すか」という記述式のアンケートを実施した。その結果、「私は先生に娘をほめられた」は、「先生が私に対し娘についてのほめ言葉を述べた」とう場面で使われることが明らかになった。しかし、第三者 A が第三者 B に対し私の絵についてほめの言葉を述べたのを目撃した場合、つまり、行為を受けていない場合でも、「私は A に絵をほめられた」と言うことも明らかになった。以上のアンケート結果をふまえ、持ち主受身文の被害性について、「私は知らない人に腕をつかまれた」のように受身文のガ格名詞句が行為を受けている場合、および「私は先生に娘をほめられた」のように行為を受けているという解釈が可能な場合は（実際に受けていなくても）被害性のない解釈が可能であり、「私は友達に自転車を修理された」のように、行為を受けている解釈がない場合は被害性を持つと言えるということを主張した。

漢字字体規範史データセットと単字検索

守岡知彦, 劉冠偉, 高田智和

「漢字字体規範史データベース」は、各時代・各地域（国）には漢字字体の標準が存在し、その標準が変遷することを実証するために作成された「石塚漢字字体資料」（北海道大学石塚晴通名誉教授が在職中に作成、紙カードで蓄積）を前身とし、それを電子化・データベース化したもので、2005 年から 2015 年までの 10 年間、Web 上の検索サービスを提供した。

「漢字字体規範史データベース」の検索サービス停止を受け、利用者がデータセットそのものを長期にわたり安定的に利用できるよう、オープンデータとして、2018 年から「漢字字体規範史データセット」の公開を開始した (<https://gitlab.hng-data.org/HNG/hng-data/>)。「漢字字体規範史データセット」は、全字形用例の画像（紙カード画像）、字形画像（代表字形の切り抜き画像）、字種・用例数などのメタデータから成り、2018 年 9 月現在、漢籍・仏典・国書等の 60 資料を収録している。

「漢字字体規範史データセット」のための検索サービスとしては、「漢字字体規範史データセット単字検索」を開発し、2019 年 5 月からサービスを開始した (<https://search.hng-data.org/>)。従来の「漢字字体規範史データベース」風の検索・表示方法を再現する一方、CHISE-wiki（Character Information Service Environment, <http://www.chise.org/>）上の紙カード画像及び文字情報へのリンクを介した CHISE ベースの検索機能や、UniHan, GlyphWiki などの国際的に利用されている文字データベースとの連携も実現している。また、「漢字字体規範史データセット単字検索」サーバでは、全用例検索、指定した資料内における用例の検索、資料一覧の取得、Web 検索の実行の 4 種の API も提供している。

漢語通時コーパスの構築 —「大地コーパス」の設計と目標—

王鼎

2019 年 6 月中国科学研究費の重点プロジェクトとして、「大地コーパス」が採択され、現在、5 か年計画での漢語研究を目的とする通時コーパスの構築が進行中である。

漢語の研究は、山田孝雄(1940)『國語の中に於ける漢語の研究』(寶文館)によってその礎が築かれ、佐藤喜代治など多くの学者により研究が積み上げられてきた。特に、近・現代の漢語については、数多の研究成果とともに、「近代漢語の流行」、「近代訳語の創出と共有」、「現代日中同形語の共時比較」など、巨視的な視座も形成されている。一方、史的研究に関しては、個別的な語や特定の資料を対象とする漢語研究は多く見られるものの、語彙史を体系的に把握するにあたり、『日本語学研究事典』にも指摘されているように「各時代の漢語の分類、そしてその移入の経路や前代とのかかわり」(「漢語」の項目、佐藤武義筆)など、多くの課題がなお取り残されている。

漢語語彙史の体系的な研究は、中国と日本の夥しい古代文献を対象としなければならない。コーパスの整備が期待される場所であるが、残念ながら漢語研究を目的とする通時コーパスは、管見の限り未だ存在しないようである。「大地コーパス」プロジェクトは、こうしたことを背景としてスタートしたもので、日本と中国の古代文献を幅広く収録し、なるべく最良の底本を選び、語彙史の研究に適する信憑性の高い研究データの構築を目指し、漢語研究のための多様な検索、比較、統計機能を提供する予定である。

本コーパスの目標は、日本の漢語語彙史を、中日漢語交流史のなかで捉え、計量分析をもって体系化することにある。さらに、「漢語」を通して語彙の存在・変化の力関係を、時間軸の上で演算する数学方法の可能性を模索するコーパスとして、「大地コーパス」を位置づけたい。

共通語化最終段階における方言使用状況 ―第 1～4 回鶴岡共通語化調査データの公開―

鍵水兼貴, 高田智和

国立国語研究所では山形県鶴岡市において約 20 年間隔(1950, 1971, 1991, 2011 年)で共通語化調査(以下,「鶴岡調査」)を実施している。2017 年からは調査データの公開作業を行っている。本発表では, 2011 年の第 4 回調査の結果を追加したデータベースの最新版である「鶴岡調査データベース ver. 3.0」を, 2019 年 11 月の公開に先立って紹介する。「鶴岡調査データベース ver. 3.0」では, 音声・音韻項目 36 項目について 4 回の鶴岡調査の 61 年間にわたる共通語化に関する経年調査のデータが利用可能である。第 4 回調査の結果は共通語化の進展が著しく, その中での方言の使用状況を考察できる。また, 方言使用中心の第 1 回調査から共通語化最終段階といえる第 4 回調査まで, 共通語化過程の全体が分析可能となる。

第 1～3 回公開データによる研究からは, ①データの個人のばらつきが大きい, ②時代が下るにつれて共通語化が進む一方で個人内変化では方言化が進む人が多い, ③1940 年代以降の生まれの人は方言化はほとんどみられず共通語化がほぼ完了している, という点が指摘されている。そのため, 第 4 回調査を入れたパネルサンプルを含めて, どのような傾向がみられるかを分析した。その結果, ①' 第 4 回調査では共通語使用率が 100%に近いたため, 個人のばらつきが減少した。②' 第 4 回調査では共通語化が優勢であり, 方言化はごく一部であった。③' 1940 年代以降でも少数だけが方言化がみられ, 語中子音の有声化に関わっていることが分かった。全体としては共通語化が完了した段階になったが, ③' で 1940 年代以降に方言化した人々は, 共通語使用率は第 3 回調査での 100%から第 4 回調査で 70～80%程度まで下がっていた。これは語中子音の有声化項目での方言化であり, 実際には, 1940 年代以降の生まれの人でも方言音声化した状態でのコミュニケーションが行われていることを示している。

慣用音と呉音とのはざま ―現代漢和辞典と近世法華經字音―

宋在漢, 中澤信幸

日本漢字音を系統別あるいは種類別に分けると、一般的に呉音・漢音・唐音という三つの枠が設けられる。しかし、これらの体系から外れている、いわゆる「慣用音」というものも存在し、通常、漢和辞典でよく見られる。この慣用音においては、①辞典の慣用音と現存文献の字音との間に食い違いがある、②同じ漢字において、辞典ごとに記載された慣用音が異なる、という問題点がある。

本発表では、常用漢字 2,136 字の中、8 種の漢和辞典のいずれかで慣用音として認めている 478 字を抜き出し、このうち幾つかの用例を対象にした。それらにおける慣用音と呉音について、近世法華經字音学及び近世字音仮名遣い関連の文献との対照を通じて、相違点やその淵源について考察を行った。

漢和辞典における慣用音の存在は、近世字音仮名遣いの方法論をそのまま踏襲した結果である。そして、伝統的な字音（呉音）は、現代漢和字典では慣用音に繋がるものが多い。近世法華經字音には、伝統音と韻書による改変音とが共存する。（宗派によって異なる。）これらが後世慣用音とされている例もある。

つまり、演繹によって生じた字音と文献呉音とのズレから発生したものが慣用音なのである。したがって、慣用音については、検証できる範囲で実証的な検討を始めるべきであり、このような帰納的な方法が、漢和辞典における字音の客観性を確保することにも繋がるのである。

『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』の活用法の紹介と終助詞「ね」、「よ」、「よね」の使用実態の分析

宇佐美まゆみ

本発表では、昨年公開された国立国語研究所『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』（以降、『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』）の特徴と活用法を、コーパスに同胞されている「データの情報一覧」というエクセルファイルを中心に紹介する。また、分析の仕方の一例として、終助詞「ね」、「よ」、「よね」の使用実態の分析結果を示す。『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』とは、シナリオのない自発的な自然会話を、母語場面、接触場面の初対面会話、友人同士の会話、教師と学生の論文指導場面等のサブ・グループごとに、年齢や性を条件統制して収集した会話データをまとめたもので、1 会話 20 分程度の会話、333 会話（約 79 時間）が収録されている。本稿では、初めて知る方のために、改めて簡単に『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』を紹介した上で、これまで紹介されていなかった「トランスクリプト・音声」以外に本コーパスに同胞されているその他の情報源（データ）を紹介し、コーパスと合わせて活用することを強く推奨したい。本発表では、本コーパスを利用した研究の一例として、先行研究でまとめたデータからさらに条件統制を行い、本コーパス 333 会話のうち、同一条件を満たす 155 会話をコアのデータ（学生話者の同等の相手との初対面会話、友人同士の会話）として抽出し、コーパス構築側の情報提供の一部として 155 会話という大量の会話における終助詞「ね」、「よ」、「よね」の使用実態の全体的傾向を提示した。ただ、今後、個人の研究者が、本コーパスを利用する際には、本稿で紹介した本コーパスに同胞されているエクセルファイルの「データの情報一覧」を活用して、各人の研究目的に適合する会話を、条件を明確にして抽出した上で、質的分析も加えてより細やかに分析することを奨めたい。大量のコーパスの中から、目的に応じて精選されたより少数の会話をを用いて、談話の流れや、発話のやりとりといった「相互作用」を十分に考慮した質的分析を行うことは、語用論的分析の発展のためには、極めて重要だからである。

埼玉県羽生市三田ヶ谷平島地区における対称詞選択・被選択規則の言語行動学的考察

吉岡希光

本研究は、埼玉県北東部に位置する羽生市三田ヶ谷平島地区(全戸数9軒, 全住民数28人)における住民相互の対称詞と接続する連体助詞に該当する部分の選択・被選択規則を言語行動学的に明らかにすることを目的とする。調査は、真田信治(1990)『地域言語の社会言語学的研究』(和泉書院)の方法にならい、調査対象者全員を受信者として想定し、回答していただくかたちで実施した。分析は、真田(前掲書)にみられる調査対象住民総当たりの表を作成し、さらに、Ervin-Tripp, S. (1972) 'Sociolinguistic Rules Alteration and Co-Occurrence'. In J. Gumperz, & D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics*. (Cambridge Basil Blackwell. Scientific Research An Academic Publisher), 藤田勝良(1984)「呼称と述部待遇表現—山口調査にもとづいて—」『国語学』136における変種選択規則分析の方法を参考とし、対称詞と連体助詞部分における選択規則(ある人が、コミュニケーション発信者として自分に以外の全対象住民に対しどのように話しかけているか)と、さらに新たな視点にとりて導入した被選択規則(ある人が、コミュニケーション受信者として自分以外の全対象住民からどのように話しかけられているか)を明らかにし、関わる要因・メカニズムを考察した。さらに、連体助詞該当部分については、藤田尚子(1999)『『コレハ私ノダ。』における『ノ』の性質—北陸方言と共通語の対照方言学的考察—』(齋藤孝滋編『地域言語調査研究法』おうふう)の視点により、バリエーションの成立過程を推定した。

助詞の使用頻度から見た中古日本語の特徴と訓点資料との関係

廉田 浩

上代から中古にかけて、日本語（中央語）には相当の変化があったことが知られている。しかし、機能語等の用法変化については、必ずしもその原因が明解になっていない。実際に主要助詞の使用頻度を観察すると、通常の自律的通時変化では考えにくい変化形態のものがあリ、その要因としては、人為的・社会的な現象が考えられ、その有力候補として、大量の漢文資料の導入とその訓読の（間接的な）影響が考えられる。本発表では、これらについて考察する。その際に、平安初期・後期に成立した訓点資料（訓点語）の助詞使用形態との対照が重要である。

平安初期までの訓点資料に関しては、①そもそも当時は漢文訓読体以外に書き言葉の標準が確立されていなかった点、②圧倒的な格差のある中国文化や思想の流入を日本語で受け止めるため、言語の整備や権威付けが必要であったと考えられる点、このような諸点を勘案し、少なくとも中古日本語書き言葉に対してある種「先導的役割」を果たした、即ち、漢文訓読が中古日本語の助詞の用法にも影響を与え、その変化に関与したのではないかとの仮説を設定し、これを検証する。和文資料としては、「日本語歴史コーパス：国立国語研究所」中の韻文と散文の代表的なものを選び、訓点資料としては、加點時期が平安初期のもの「春日正治(1969)『西大寺本金光明最勝王經古點の国語学的研究』勉強社」と平安後期のもの「大坪併治(1968)『訓點資料の研究』風間書房」を選んで、主要な助詞、特に、格助詞ガ、係助詞ヤ・カ、係助詞ハについて、その用法や使用頻度の変化を定量的に分析した結果、少なくとも上代から中古のこれらの助詞の用法・頻度変化に関しては、訓点語の強い影響が推定されることが分かった。

特に初期訓点語での助詞の用法は、上代の古い時期の口頭語の用法に準拠している可能性が高く、以降の口頭語の助詞用法変化を反映した万葉集に対して、中古和文資料（韻文・散文を含む）では、初期訓点語の影響で助詞用法が一時的に時代に逆行変化し、この影響が薄くなった中古末から中世初に元に戻ったものと考えられる。

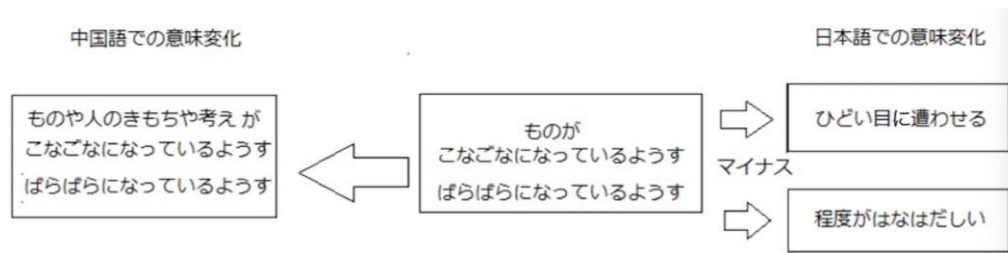
漢語副詞の意味変化と表記 —「散々」を例として—

蔡嘉昱

中国語から輸入した漢語は、意味や用法を変化させながら日本語に定着している。漢語副詞は、サ変動詞や形容動詞と比べて、日本語で独自に変化しており、副詞の用法を獲得する漢語副詞の受容は不規則的な変化であると言える。

本発表は、I 類の一例である「散々」の意味変化の過程を明らかにすることを目的とする。また、日本語において、「一所・一緒」のような、意味変化が漢語の表記に影響を与える事例が見られる。このため、本発表では、このような表記の変化が「散々」のような漢語副詞に見られるか否かを考察する。

調査の結果、図 1 に示すように、「散々」の中国語での意味変化と日本語での意味変化異なる方向で変化していくことがわかる。「散々」は、日本語において、様子、状態を示す意味から抽象的な程度的意味を獲得したことが分かる。



「散々」の意味変化と使用形式の関係について、抽象的な程度の激しさを表しうようになった後、「に」を伴わないで副詞として使用される用例が多くなっていると考えられる。意味変化と表記の関係について、仮名で表記される最初例は中国語にある意味で使用される用例であるが、全体的に中国語にある意味が使用される場合より、日本語独自の意味が使用される場合では平仮名表記が多く使用されている。

統語解析情報付きコーパスを用いたテキストジャンル間の比較 三好伸芳

本研究の目的は、統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）である NPCMJ を用いて、文学的文章と説明的文章における主述関係の分布の差異を調査し、各テキストジャンルの特性の一端を構文的・文法的観点から明らかにすることである。BCCWJ をはじめとする従来の形態情報のみが付与されたコーパスでは、線状の関係を検索することは可能でも、次の下線部のような階層的関係（係り受け関係）を捉えることは困難である。

- (i) 老人は額を、元の窓の所へ立てかけて、席につくと、私にもその向う側へ坐る様に、手真似をしながら、私の顔を見つめて、こんなことを云った。

132_aozora_Edogawa-1929;JP

NPCMJ を用いた検索では、上述のような例文（本調査で実際に得られた文）も容易に取り出すことが可能である。

名詞や動詞がどのようなテキストジャンルに現れやすいかといった点については、樺島忠夫（1955）「類別した品詞の比率に見られる規則性」（『国語国文』24-6）などに指摘があるが、「どのようなテキストジャンルにおいて、どのような係り受け関係が生じやすいのか」という問題は、技術的な問題からこれまで扱われてこなかった。そこで本研究では、NPCMJ を用いて「どのタイプの名詞句が、どのタイプの主節述語と結びつくのか」を量的に調査した。

調査の結果、文学的文章に見られる顕著な特徴として、次のような代名詞を項とする名詞述語文が相対的に多く生起することが明らかになった。

- (ii) それは何か食べものの匂いだった。

469_aozora_Harada-1960;JP

当該構文では、代名詞の現場指示的性質と叙想的テンスにより、発話者の視点からの探索と場面転換が効果的に表現されている。以上の観察から、本調査では、「主語＝指示代名詞／名詞述語＝タ形」という構文が文学的文章に特徴的に表れており、テキストジャンル間の差異が階層的関係（係り受け関係）からも示せることを明らかにした。